

先人の知恵から

15

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

諺を使うようにすればするほど、諺に興味が増える。普段から使う諺だけを紹介しているが、世界中にその国独特の諺がある。先人の知恵からでもいくつか英語で同じ意味でつかわれるものを紹介しているが、言語は違っても、言い伝えられてきたことは時代が変わっても真であると感じている。

今回は、か行から次の8つを挙げてみた。

- ・影を畏れ跡を悪む
- ・風が吹けば桶屋が儲かる
- ・語り下手の聞き上手
- ・火中の栗を拾う
- ・河童の川流れ
- ・勝てば官軍負ければ賊軍

<影を畏れ跡を悪む>

自分自身を見失って苦悩を作り上げ、心の休まる時がないことのたとえ。影や足跡が自分の後ろから迫ってくるのを嫌う意から。(荘子)

この諺の元となる故事がある。「ある人が自分の影におびえ、影から逃げようと走ったり、足跡を心配して足を上げたりし続けて結局力尽きて死んでしまった。日陰に入れば影は消え、休めば足跡などつかないが、そこに気づかなかった」という話である。

気にしだすと色々なことが気になり始める。例えば普段ずっとカチカチになっている柱時計の音も、気にしだすと気になって眠れなくなるのも同じである。不安障害の方々はこのような状態にあるのだが、子中もこういうことは度々起こる。

発達障害の話がテレビやネットで流れれば不安になって、ちょっとした子どもの様子の中でそれに当てはまるものを探し、さらに不安を自らあおる。誘拐事件が報道されれば、外は怖いからと部屋に閉じこもる。或いは、夫のちょっとした行動にも性的虐待を疑って、一切触らせなくなり、夫婦関係が劣悪になったケースもあった。最近では食べ物の問題に過敏な母親も増えていて、

子どもが栄養失調になったこともある。

そんな子育て中の親に、この諺を伝えることがある。心配し過ぎたらきりが無いし、不安は不安を呼び、増大していく。それは決して良い結果を招かないことを伝える例としてわかりやすいのではと思う。

<風が吹けば桶屋が儲かる>

あることが原因となって、意外な結果が生じたり、思いがけないところに影響があったりすることのたとえ。また、あてにならないことを期待する例えにも言う。

風が吹く→砂埃が立つ→砂が目に入り失明する人が増える→失明した人は三味線を習う→三味線をたくさん作らなければならぬ→三味線に貼る猫の皮が大量に必要となる→猫が減る→ネズミが増える→ネズミが食べ物を入れてある桶(樽)をかじる→桶屋が儲かる という因果関係の昔話からできた言葉。

この諺は、同じ失敗を繰り返している親に使うことがある。今までと違うことをやってみようかと伝えても、その勇気が湧かない人もいる。人はいつもと同じことについてはその結果が変わらなくても、どんな結果が出るかわからない行動よりも、安心して行動をとれるものだ。

しかし、それでは変化はない。小さくても変化をおこさせるためには、いつもと違うことをする必要はある。そんな時にこの諺を使って説明すると、なんとなくわかってくれる。もちろん、その結果がどうなるか、この諺ほど飛躍した結果になることは少ないということも付け加える。

高校生くらいの子どもにも使える。最初

にこの諺を知っているか聞くと、知っている子は少ないので、こういふことだよと説明する。そうすると「風桶かあ」などという。なるほどそういう言い方をすればよいのかと納得する。そして、何かにつけ、行動を起こすことに消極的な子どもには、このような話もあって、物事の因果関係というのはわからないものだと言えど、結構面白がってくれる。結果的に笑ってしまい、不安が払しょくされたりする。何が良い結果を招くか本当にわからない。

英語では・・・

It is an ill wind that blows no man good.

(誰にも利益を与えない風は悪い風である)

<語り下手の聞き上手>

自分で話すのはあまりうまくないが、人から話を聞き出すのは上手であるということ。

人と話すことが苦手な人は多い。メールでのやり取りは嫌がらないが、人と話すときにどのタイミングで、どんな話をしたらよいかわからないという子にも出会う。話し上手な人を羨み、自分もあんな風に話し上手になりたいと言う。しかし、そう簡単に、話し上手になれるものではない。だからと言って最初からあきらめなさいと言う話でもない。

そこで、この諺を出して、話し上手になるための一歩として聞き上手になってみようかと伝える。話し手は聞き手がいなくてつまらないし盛り上がらない。良い聞き手になって、話し手の話し方、内容、様子をし

っかり観察しようと伝えるのである。そうして、少しずつ真似てみようと。一歩ずつではあるが、上手になっていく様子が見える子もいる。また、一方で聞き上手の自分が好きになる子もいる。話し手だけでも聞き手だけでも世の中は成り立たない。双方が程よく存在することが大切なのだ。

<火中の栗を拾う>

そそのかされて、他人の利益のために無理をして危険をおかすこと。又敢えて困難な事柄に身を乗り出すことのとえ。

この諺は、対人援助職にも使うことがあるし、子育て中の親に使うこともある。

人は出来ることに限りがある。自分の力量を超えてやろうとしても、滅多に上手くいくことはなく、かえって周りに迷惑をかけることにもなりかねない。難しいこと、困難なことにチャレンジする気持ちや勇氣は否定すべきではないが、だからと言って何でもかんでも手を出せばけがをする。この諺はそんなことへの戒めになるのではないかと思う。

英語では・・・

Take the chestnuts out of the fire with the cat's paw. (猫の足で火の中の栗をかき出せ)

<河童の川流れ>

どんな名人・達人でも、時には失敗する事もあると言うたとえ。泳ぎが達人な河童でも、時には水の勢いに流される意から。

最近、子どもたちでも親であっても、失

敗を恐れる風潮が感じられる。失敗を恐れれば、どうしても消極的になるし、過度に慎重になる。石橋を叩いて渡るならともかく、叩き壊して、渡れないと言う。或いは「やっぱり橋は壊れた、渡らなくてよかった」と言う。そんなことでは永遠に向こう岸には渡れない。

河童だって流される、猿も木から落ちる、弘法も筆の誤り、そんな諺を並べて、失敗を恐れないようにと説明してみる。そして、失敗することで学ぶことも一杯あると伝える。或いは、親には、子どもが小さいうちに失敗や挫折を味あわせておくことの大切さを伝える。大人になってから初めて挫折を味わうと、その落ち込みは尋常ではなく立ち直れなくなることもあるが、子どものうちに味わっていると、立ち直れると知っているのですほど大きな落ち込みにならない。そう伝えるとなるほどと納得されることも多い。

前述のように似たような諺がいくつかあるが、この河童の川流れは好きだ。川に流される河童の様子を想像すると、なんだか気持ちよさそうで楽しそうに感じるからである。ごつごつした岩場を想像したら痛そうだが、何故かそういう場面は想像しないのだ。筆者が伝えた人たちも、痛い場面ではなく、気持ちよさそうなイメージを持ってくれることが多い。

<勝てば官軍負ければ賊軍>

道理に合っても合わなくても、戦いに勝ったものが正義となり、負けたものは不正となると言うたとえ。勝敗によって正邪善悪が決まると言う意。略して「勝てば官軍」だけで用いられる事もある。明治維新のと

きに生まれた言葉。

「無理が通れば道理が引っ込む」や「長いものには巻かれろ」という諺もある。多数決の論理も似ている。勝った方の意見が通る。しかし、少数意見や負けた方の考え方は必ず間違っているのだろうか？時には少数決と言うやり方であっても良いのではと思うほど、なんでも多数決で決めているように思う。それが民主主義と言われればそうだが・・・。

子どもたちが親に話すときに「みんな・・・している」と言う言い方をする。そうすると母親は子どもが仲間外れになるのを畏れて、子どもの希望を叶える。ゲームを買うのがそのよい例である。

そして誰もがパソコンやスマホを持つようになった現代では、インターネットの活用が当然で、それが教育の場でも必要だとなり、小学校3年生からプログラミングの授業を入れるなどと言う話も出ている。ソフトが充実してきている現代になぜプログラミングの授業が必要になるのか。何か業者やパソコンが重要だと騒いでいる人間たちの声引っ張られ過ぎていないだろうか心配になる。

パソコンの知識やプログラミング技法などについて、筆者は大学に入ってから学んだ。大学生はまだ頭脳も柔らかい。知識の吸収も十分できる。なんでも早くという考え方は安易すぎないか。こうした授業など高校に入ってからでも十分間に合うだろうし、百歩譲って中学校でも良い話ではないかと思う。しかし文科省がそれを推進し、教育現場はそれに従っているうちに、それが当たり前で、必然となってしまふ。正に

勝てば官軍である。

パソコンやスマホの普及に伴い、ネット情報との戦いが始まっている。何が正しくて何が間違っているのか、最近ではよくわからないことも多い。ネット情報も然りである。それでもネットでいっぱい流れている情報に、人々は大きく影響されている。真偽のほどはどうしてもよく、一度流れた情報を信じ込み、訂正することが難しい場合も度々ある。我々支援者としては、正しい情報を入れることに汲々する。

先日もこんな話があった。医師や保健師等が、ある母親に赤ちゃんの育て方についてアドバイスをするのだが入らない。パンフレットや育児書の類を持ってきて見せても入らない。ところがネット情報をスマホで見せたら一気に入った。ネット情報は、多くの人が納得している情報であると勘違いしているようであった。その考え方の修正は言わずもがなで、出来なかったようだ。

今の時代スマホでこちらに都合の良い情報を探し、それを見せるという手法も支援方法の一つに入れなければならないようだ。正義と悪も時代によって異なるところもある。何が正しいか間違っているかも同様だ。官軍に逆らって賊軍として排除されるより、官軍に従う振で、うまく使うようにしていかなばならないのだろう。

悪い例として、この諺を提示し、自分たちを戒めるようにしている。

英語では・・・

Might is right. (力は正義である)

Successful sin passes for virtue. (罪も成功すると徳として通る)